隠亡堀

国枝史郎

青空文庫

一

「伊右衛門(いえもん)さん、久しぶりで」
こう云ったのは直助(なおすけ)であった。
今の商売は鰻掻(うなぎかき)であった。
昔の商売は薬売であった。
一名直助権兵衛(ごんべえ)とも呼ばれた。
「うん、暫く逢わなかったな」
こう云ったのは伊右衛門であった。
昔は塩谷家(えんやけ)の家来であった。

今は無禄の浪人であった。

「考えて見りゃあお前さんは、私に執っちゃあ敵だね」

一向敵でも無さそうに、にやにや笑い乍ら直助は言った。

「洒落かい、それとも無駄なのか」伊右衛門には興味も無さそうであった。「洒落にしちゃあ恐ろしい不味い。無駄にしちゃあ……いかにも無駄だ」

「でもね伊右衛門さん、そうじゃあ無いか。私の女房の姉というのは、四谷左門の娘お岩、その左門とお岩とを、お前さんは文字通り殺したんだからね」

「そうとも文字通り殺したよ。お岩を呉れろと云った所、左門奴頑固に断わったからな。それで簡単に叩っ切ったのさ」

「でも何うしてお岩さん迄？」
「うん、増花が出来たからよ」
「伊藤喜兵衛のお嬢さんが、惚れていたとは聞いていたが」
「お梅と云って別嬪だった」
「お岩さんより可かったんだね？」
「第一若くて初心だったよ。子を産みそうな女ではなかった。玩具のような女だったよ」
「へへえ、そこへ打ち込んだんだね！」
「何しろお岩は古女房、そこへ持って来て子を産みやあがった。どうもね、女は子を産んじゃあ不可ねえ。ひどく窶れてみっともなくなる。肋骨などがギロギロする。尤も金持の家庭なら、

一人ぐらいは可いだろう。産後の肥立が成功すると、体の膏がすっかり脱けて、却って別嬪になるそうだからな。ところが不幸にもあの時分、俺等はヤケに貧乏だったものさ」

「でも、殺さずとも可かったろうに」

「ナーニ、手にかけて殺したんじゃあねえ。変な具合で自殺したんだ。尤も自分で死ななかったら、屹度俺は殺したろうよ」

「恨死に死んだんだね」

「お説の通りだ、恨死に死んだ」

「で、只今はお梅さんと、仲宜くおくらしでござんすかえ？」

直助は古風に冷かすように訊いた。

「何さ、お梅も喜兵衛奴も、婚礼の晩に叩っ切って了った」

伊右衛門は斯う云うと苦笑した。

「お梅は何うでも可かったが、持参金だけは欲しかった。伊藤の家庭と来たひにゃあ、時々蔵から小判を出して、錆を落とさなけりゃあならねえ程、うんとこさ金があったんだからなあ」

「だが何うして殺したんで？」

「時の機勢という奴さ」伊右衛門はひどく冷淡に「お梅の顔がお岩に見え、喜兵衛の顔が小仏小平、其奴の顔に見えたのでな、ヒョイと刀を引っこ抜くと、コロコロと首が落ちたってものさ」

「ははあ、其奴ぁお岩さんの怨だ」

「世間でもそんなことを云っていたよ」

「でお前さんは何う思うので？」

「何う思うとは何を何う？」
「幽霊が恐くはありませんかね？」
「それより俺は斯う云い度いのさ。人間の良心というものは、麻痺させようと思えば麻痺出来るとな」
鳥渡直助には解らなかった。
二人は暫く黙っていた。
此処は砂村隠亡堀であった。
一所に土橋がかかっていた。その下に枯蘆が茂っていた。
また一所に樋の口があった。枯れた苔が食っ付いていた。
前方はドロンとした堀であった。さあ、確に鰻は居そうだ。
土手の背後に石地蔵があった。鼻が半分欠けていた。慈悲円満

にも見えなかった。
土手の向うは田圃であった。
稲村が飛び飛びに立っていた。
それは曇天の夕暮であった。
茶がかった渋い風景であった。
芭蕉(ばしょう)好み、そんな景色だ。
伊右衛門の前には釣棹(つりざお)が、三本が所下ろされてあった。
その一本がピクピクと揺れた。
「ああ出来た」
と直助が云った。
で、伊右衛門は上げてみた。

一尾の鯰が掛かっていた。
ポンと畚へ投げ込んだ。
「ところで何うだい、お前の方は？　お袖と仲宜く暮らしているのか？」
伊右衛門は斯う云って覗き込んだ。
「それがね、洵に変挺なんで」
直助は此処で薄笑いをした。

二

「変挺だって？　何う変なんだ？」

伊右衛門は興味を持ったらしい。

「それ、お前さんもご存知の通り、お袖の許婚は佐藤与茂七、其奴を私が叩っ切り、敵の目付かる其うち中、俺等の所へ来るがいいと、斯う云ってお袖を連れて来たんでしょう。ところがお袖奴真に受けて、許婚の敵の知れる迄は、私に肌身を許さないそうで」

「やれやれ其奴はお気の毒だ。お前にしては気が長いな」

「短くしてえんだが成りそうもねえ」

「構うものか、腕力でやるさ」

「其奴だけは何うも出来そうもねえ」

「そりゃあ然うだろう、惚れてるからな」嘲笑うように鼻を鳴

らした。「女を占めようと思ったら、決して此方(こっち)で惚れちゃあ不(い)可(け)ねえ」

「お談義かね、面白くもねえ」直助はフイと横を向いた。「惚れねえ前なら其お談義、役に立つかもしれねえが、今の私にゃあ役立たねえね」

「じゃあ最(も)う一つ手段がある」

「へえ、もう一つ、聞かして下せえ」

「好む所に応ずるのよ」

「あっさりしていて解らねえ」

「いいか、お袖へ斯う云うのさ。敵を目付けた其上に、助太刀ぐらいはしてやるから、俺の云うことを聞くがいいとな」

「成程、大きに可いかも知れねえ」
「逆応用という奴さ」
「今夜あたり遣っ付けるか」
「ところで何うだ、稼業の方は？」
「今年は何うやら鰻奴が、上方の方へでも引っ越したらしい。何処を漁っても獲物がねえ」
「じゃあ随分貧的だろう？」
「顔色を見てくれ、艶があるかね」
「お袖は何うだ？　顔の艶は？」
「それがさ、俺よりもう一つ悪い」
「つまり栄養不良だな」

「商売物だけは食わせられねえ」
「今夜だけ其奴(そいつ)を食わせてやれ」
「え、鰻をかい？　今夜だけね？」
「そうさ、精力が無かったら、色気の方だって起こるめえ」
「うん、こいつぁ金言だ」
「それ、金言という奴は、行う所に値打がある」
「よしよし今夜だけ食わせてやろう」
「そうだ、其処だよ、今夜だけだ。明日になったら麦飯をやんな」
「麦飯なら毎日食っている」
「おお然(そ)うか、そいつぁ不可(いけ)ねえ。豆腐のからでも食わせるがいい」伊右衛門は此処でニヤリとした。「一旦手中に入れたからは、

女は虐(いじ)めて虐め抜くに限る。そうすると屹度(きっと)従いて来る。手が弛(ゆる)むと逃げ出すぞ」

「悪にかけちゃあお前(めえ)が上だ」

「天井抜けの不義非道」

「首が飛んでも動いて見せるか」

「なにさ、良心を麻痺させる、だけよ」

また釣棹が動き出した。

グイと伊右衛門は引き上げた。

「や、南無三、餌(え)を取られた。……それは然(そ)うとオイ直助、今日は鰻は取れたのか？」

「うんにゃ」

と直助は首を振った。「店で買って食わせる気だ」
「そんなに金があるのかえ？」
「金はねえが料(しろ)がある」懐中(ふところ)から櫛(くし)を取り出した。「先刻(さっき)下ろした鰻掻、歯先に掛かった黒髪から、こんな鼈甲(べっこう)が現われたってやつさ」
「おや」
と伊右衛門は眼を見張った。「たしか其奴(そいつ)はお岩の櫛！」
「いけねえいけねえ」と懐中(ふところ)へ隠した。「ふてえ分けはご免だよ」
のいと直助は立ち上った。
「それじゃあ旦那、また逢おう」

愉快な空想に耽り乍(ながら)、直助は飛ぶように帰って行った。
夕暮れがヒタヒタと迫って来た。
遠景が仄(ほのか)に暈(ぼか)された。
夜と昼との一線が来た。
「どれ棹を上げようかい」
何か樋の口から流れ出た。
菰(こも)を冠(かぶ)った板戸であった。
「覚えの杉戸」
と伊右衛門は云った。
手を板戸の角(すみ)へかけた。グーッと足下へ引き上げた。
バラリと菰を刎(はね)退(の)けた。

お岩の死骸が其処にあった。

肉が大方落ちていた。眉間が割れて血が出ていた。片眼が瘤(こぶ)のように膨れ上がっていた。

と、死骸が物を言った。

「民谷(たみや)の血筋……伊藤喜兵衛が……根葉を枯らして……この身の恨み……」

伊右衛門は高尚(ノーブル)に反問した。

「ははあ、白(せりふ)は夫(そ)れだけで？」

お岩の片眼が大きくなった。

三

「もう是(これ)で三回目だ」

伊右衛門は却って気の毒そうに言った。「実際幽霊というような物も、一回目あたりは恐ろしいよ。二回目となると稀薄になる。三回も出られると笑い度(た)くなる。お岩さん不量見は止(や)めたがいい。四回も出ると張り仆(たお)すぜ。五回出ようものなら見世物にする。……」

クルリと板戸を翻えした。

一杯に水藻を冠っていた。

「俺には大概見当が付く、水藻を取ると其下に、小平の死骸があるだろう。生前間男の濡衣(ぬれぎぬ)を着せ、――世間へ見せしめ、二人

の死骸、戸板へ打ち付け、水葬礼――ふん、そいつにしたんだからなあ。だって小平が宜(よ)くねえからよ。主人の病気を癒(なお)すは可(い)いが、俺の印籠を盗むは悪い」

ダラダラと水藻を払い落とした。

果たして小平の死骸があった。

死骸はカツと眼を剥(む)いた。

「お主(しゅ)の難病……薬下せえ」

「うんにゃ」

と伊右衛門はかぶりを振った。

「俺は要求を拒否するよ。俺にだって薬は必要だからな」

足を上げて板戸を蹴った。

死骸がバラバラと白骨になった。

「手品としては不味(まず)くない。だがね。恐怖を呼ぼうとするには、もう一段の工夫が入(い)る」

突然鬼火が燃え上った。

伊右衛門は刀へ手を掛けた。いやいや抜きはしなかった。

剛悪振りを見せようとして、グイと落差にした迄であった。

「ふんだんに燃やせよ、焼酎火をな」

非常にゆっくりした足取りで、伊右衛門は町の方へ帰って行った。

後はシーンと静(しずか)であった。

と、堀から人声がした。

「伊右衛門は度胸が据わったねえ」
それは女の声であった。
「困ったものでございます」
それは男の声であった。
板戸の上下で話しているらしい。
お岩と小平の声らしい。
「さあ、是から何(ど)うしよう」
「ああも悪党が徹底しては、どうすることも出来ません」小平の声は寂しそうであった。
「恐がらないとは不思議だねえ」お岩の声も寂しそうであった。
水面に板戸が浮かんでいた。

闇が其上を領していた。
死骸の声は沈黙した。
手近で鷽(ばん)の羽音がした。
「こうなっちゃあ仕方が無いよ。迚(とて)も無理には嚇(おど)せないからね」
お岩の声は憂鬱(ゆううつ)であった。
「あべこべに私達が嚇されます」小平の声も憂鬱であった。
「ねえ小平さん」
とお岩の声が云った。「もう祟(たた)るのは止めようよ」
「止むを得ませんね、止めましょう」
お岩の声が恥しそうに云った。
「妾(わたし)、そこでご相談があるの。……濡衣を真実(ほんと)にしましょうよ」

「え」と云った小平の声には、寧ろ喜びが溢れていた。「あの、それでは、私達二人が」

「そうよ、夫婦になりましょうよ」

「大変結構でございまする」

「これには伊右衛門も驚くだろうね」

「こんな事でもしなかったら、彼奴は吃驚りしますまい。……だが最う私達は伊右衛門のことなど、これからは勘定に入れますまい」

此処で声が一時止んだ。

骨の軋む音がした。

板戸を隔てた二つの死骸がどうやらキッスをしたらしい。

ユラユラと板戸は動き出した。
「嬉しいのよ、小平さん」
「ああ私も、お岩さん」
ユラユラと板戸は流れ出した。
南無幽霊頓生菩提（なむゆうれいとんしょうぼだい）！
お岩さんとそうして小平さん、
彼等は正（まさ）しく成仏した。
下流の方へ流れて行った。
鬼火だけが燃えていた。
真暗の夜を青い顔をして、上下左右に躍っていた。
何を一人で働くのだ。

消えろ消えろ！　とぼけた鬼火だ！

幕の閉じたのを知らないのか。

青空文庫情報

底本：「怪奇・伝奇時代小説選集2」春陽文庫、春陽堂書店
　　1999（平成11）年11月20日第1刷発行
初出：「大衆文藝」
　　1926（大正15）年6月
入力：阿和泉拓
校正：noriko saito
2007年11月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www

w.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

隠亡堀

国枝史郎

２０２０年　７月１３日　初版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　http://aozora.xisang.top/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/